

米国の公民権運動の発端は奴隷解放 奴隷解放から公民権法の

成立までの100年

ジャーナリスト

三木寛郎

ケネディの100年前に
大統領になったリンカーン

1809年2月12日。後に第16代米国大統領となるエイブラハム・リンカーンは、ケンタッキー州の片田舎に生まれた。さまざまな職業を転々としながら20代でイリノイ州に移り、スプリングフィールドという町で弁護士となり、州議会議員となった。1846年35歳の時にイリノイ州選出の米国下院議員となり、国政に乗り出すが、正義感の強い弁護士肌の彼は半ば挫折した状態で下院議員を1期のみ努めると、イリノイ州スプリングフィールドに戻り、彼の精力のほとんどを弁護士の活動に向けた。この時代、奴隷制そのものは米国南部では依然として合法であったが、北部のイリノイ州のような地域では違法とされはじめていた。そう



スプリングフィールドにあるリンカーンの家

した中、リンカーンは奴隷制には反対の立場を取り、南部を攻撃することとはしないまでも、奴隷制が拡大することには異を唱える立場だった。

しかし、リンカーンの取った立場は、南部に存在する奴隷制度については干渉するつもりはないというもので、彼は時間をかけて奴隷問題を解決しようと考えていたようだ。ところが、そんな最中、1854年に

奴隷制を推進する内容のカンザス・

ネブラスカ法が成立。これをきつかにリンカーンは再び中央政府を指すことになる。1860年5月9

日、10日にイリノイ州ディケーター

で開催された共和党イリノイ州大会で、リンカーンは初めて州推薦大

統領候補に指名された。同年11月

6日リンカーンは、民主党候補のス

ティーブン・ダグラス、南部民主党

候補のジョン・ブレッキンリッジおよ

び新党の立憲連合党候補のジョン・

ベルを破って第16代アメリカ合衆国

大統領となる。共和党からの初めて

の大統領だった。北部と西部からは

多くの支持を集めたが、残念ながら

南部では当時15州あった奴隷州の10

州で得票数が0であった。

こうして1861年3月に米国

大統領就任式を迎えたることになっ

たが、それに先駆けて1860年12

月、サウスカロライナ州が合衆国か

らの脱退条例を採択すると、ミシ

シッピ州、アラバマ州、ジョージア州、

ルイジアナ州、テキサス州、フロリダ

州、が次々と追従。さらにそのうち

6つの州が団結し、新たな憲法を制

定、「米連合国」という主権国家を

宣言し、翌年の2月にはジェファ

ソン・デイヴィスを暫定大統領に選

出してしまった。15代大統領ブキャ

ナン大統領と次期大統領のリンカー

ンはアメリカ連合国の認知を拒否。

脱退は違法であると宣言すること

なる。

奴隷解放宣言と

南北戦争の真実

大統領就任式に向かうため四半

世紀を過ごした第二の故郷スプリ

ングフィールドを出発する際にリン

カーンはこんな言葉を残している。

「皆さんへの感謝を湛えてこの土地を去る。いつになったら帰れるのか、はたまた再び帰れるのか…」

それほど悲壮な決意であったのだ。こうしてリンカーンが米国大統領に就任すると、南北戦争が勃発する。ヨーロッパの産業革命を受けて近代化する北部諸州と、黒人奴隷の労働力に支えられた綿花等の栽培を産業とする南部諸州の生活

リンカーンは戦争終結の翌月、1865年4月14日、フォード劇場で喜劇を観劇中に南部出身の俳優J・W・ブースに後頭部を撃たれ暗殺された。これが、アメリカ史上初の大統領暗殺事件である。

奴隷は解放されたが、 平等は担保されなかった

基盤の違いが大きく影響した、まさに奴隷解放を基軸とした戦いであった。ちなみに日本では南北戦争と呼ばぶが、米国では「CIVIL WAR」つまり市民戦争と呼ばれる。この戦争のさなか、1962年9月にリンカーンは奴隷解放宣言をおこなったとされているが、厳密にはこの段階で行われたのは奴隷解放予備宣言ともいべきもので、1863年の1月1日までに南部諸州が連邦に復帰しない場合にはその日を期して黒人奴隷を開放するという内容だった。もちろん、これに込める南部の州はなく、1965年3月に米連合国の首都リッチモンドが陥落して戦争が終結するまで4年にわたる戦いが続くことになる。

こうして南北戦争が終結し、南部

諸州の黒人奴隷は解放されたが、そうはいってもいきなり働き口があるわけでもなく、もともと充分な教育を受けてきたわけでもない黒人たちは、必ずしも自由で世の中を歩き回れることにはならなかった。たとえば、シェアクロッパーと呼ばれる小作制度では、それまで奴隷の主人だった地主が解放された奴隷たちに住居や耕地、種子、農具、家畜など貸し付け、クロッパーと呼ばれる黒人たちはその代償として家族ぐるみで住み込みで耕作を引き受け、収穫から法外な代償を支払う小作制が生み出されていた。場合によっては、奴隷制よりも酷い状況も生まれて行つたのである。

また、黒人と白人は公共の場でも



リンカーンの墓碑

明確に差別され、バスやレストランなどでも同席が許されなかったことはご存じの通りである。また、ビリー・ホリデーの歌った「奇妙な果実」にもあるように「KKK(クー・クラックス・クラン)」と称する白人至上主義的集団によるリンチなどで悲惨な最期を遂げた黒人たちも少なくなかった。

こうした逆境を跳ね返し、黒人たちが少なくとも法律上、白人と同等の人権を勝ち取るのは、それから100年余り後、以前本誌でも紹介した1950年代からキング牧師らによって展開された公民権運動の成

果として1964年7月、米国議会が成立、制定された公民権法まで待たなければならぬのだ。ちなみにリンカーン同様暗殺されたケネディ大統領が熱心に取り組み、その暗殺後に後任のジョンソン大統領の時に成立した。

果たして現在の米国は世界はどうだろう。黒人はもとより様々な国籍や肌の色を持つ多くの人々が、米国だけでなく世界に暮らしている。いま、明確に米国至上主義を謳う大統領の下、米国はこの先どのような100年を作り上げていくのだろうか。